

図5 入居者が所有する障害の重篤度
(障害程度区分)

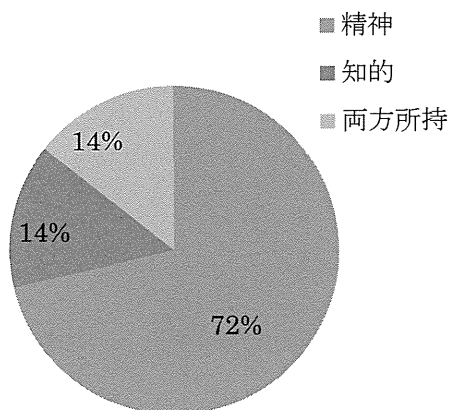


図6 入居者が持つ手帳の内訳

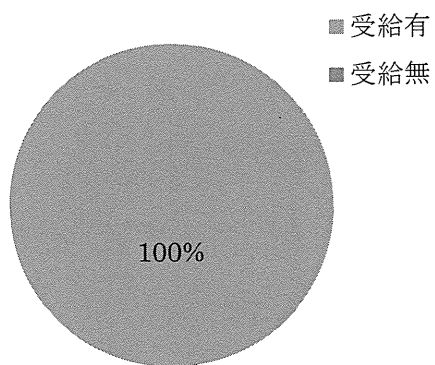


図7 入居者における障害年金の受給

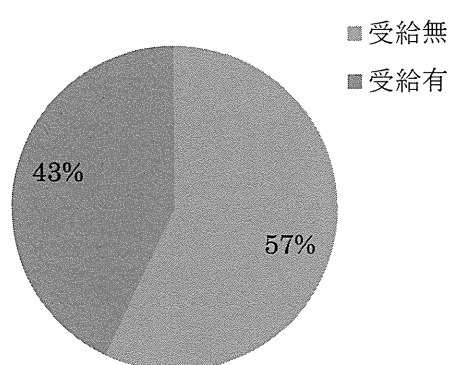


図8 入居者における生活保護の受給状況

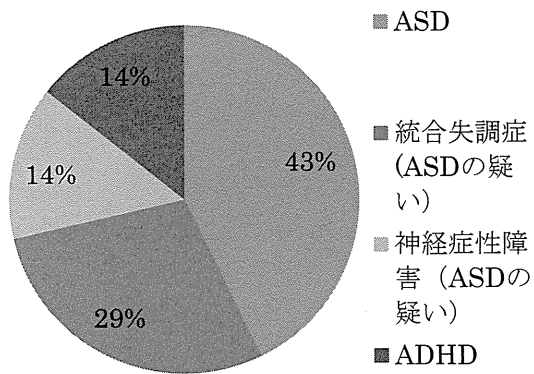


図9 入居者の受けている診断

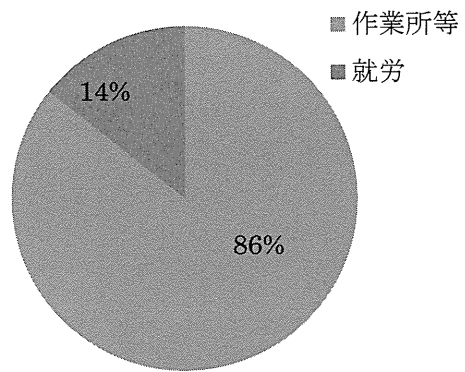


図10 入居者の日中の所属先

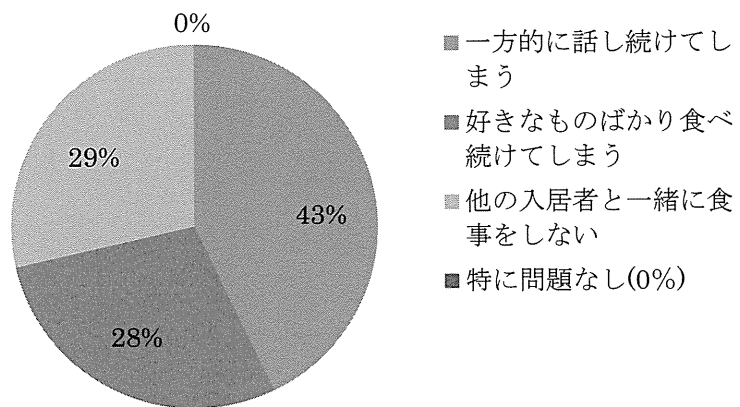


図11 入居者に見られる食事場面での問題

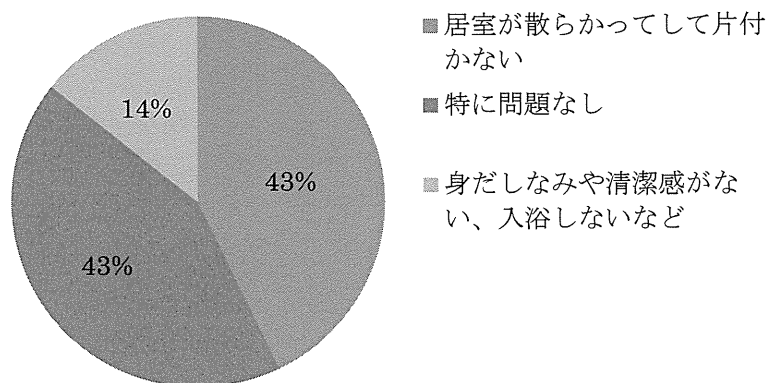


図12 入居者に見られる衛生管理の問題

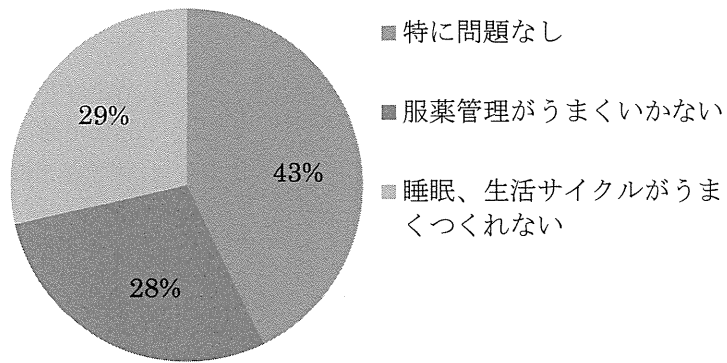


図 1 3 入居者に見られる健康管理の問題

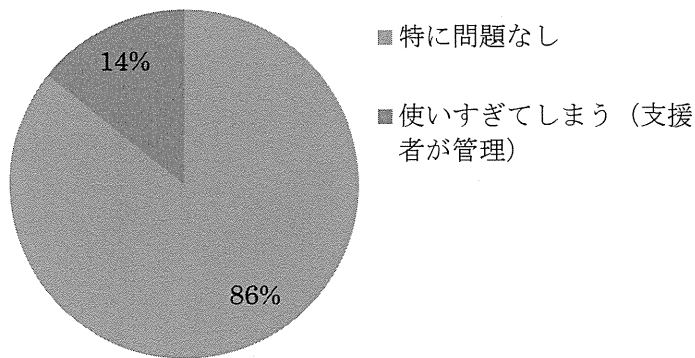


図 1 4 入居者に見られる金銭管理の問題

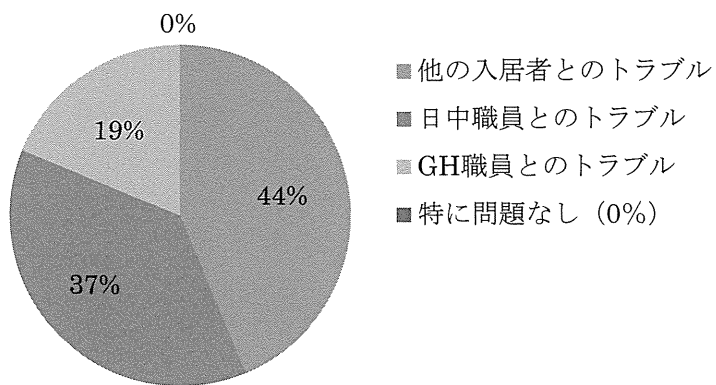


図 1 5 入居者に見られる人とのかかわりに関する問題

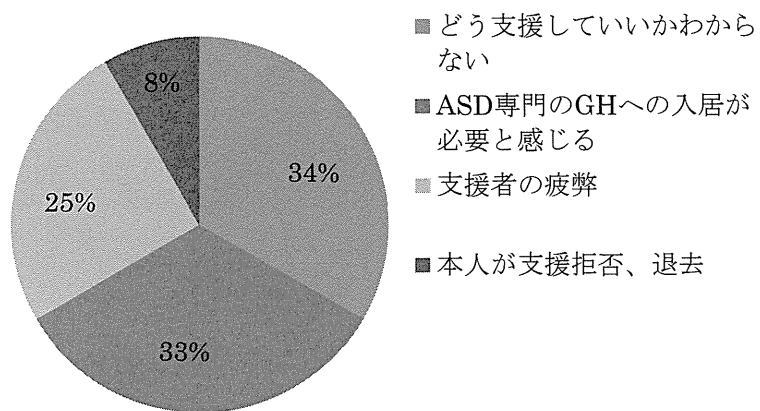


図16 入居者に見られるその他の問題

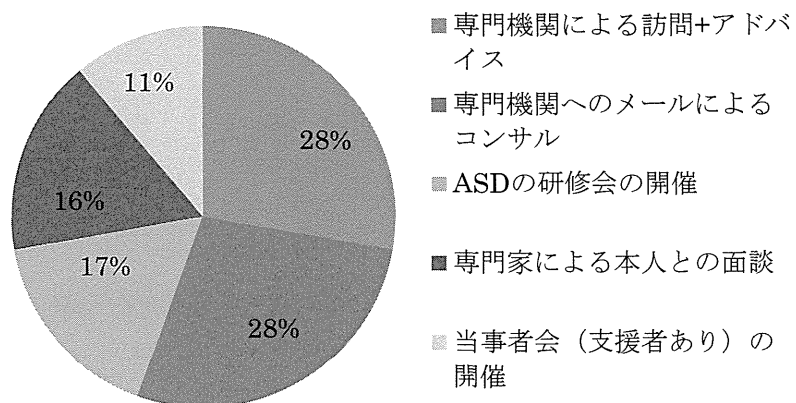


図17 入居者に見られる問題の解決に必要な方策

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

成人発達障害者が入居する滋賀県内のグループホームにおける
生活支援の現状およびその課題

分担研究者

肥後祥治（鹿児島大学教育学部）

研究協力者

巽 亮太（社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団）

山本 彩（社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団）

松田裕次郎（社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団）

研究要旨

本研究では、現在運営されているグループホーム(以下、GH)において、発達障害者に対してどのような支援を行っており、どのような困難があるか、更にそれらの困難を解決していくためにはどのような方策が必要であると現場職員は実感しているかについて、グループホーム(以下、GH)の支援者への聞き取り調査を行った。支援における困難では、人とのかわりに関して最も多く、対人関係面での支援が提供できる環境であるということは必要不可欠なことだと推測された。さらに支援者側の疲弊を軽減する方策として、発達障害やその支援に関する知識を学ぶ機会が重要であることが示唆された。以上から、発達障害者の生活を支えようとする時、対人関係に関する支援が受けられるような環境整備が必須であるとともに、支援者側に対しての環境整備も必要であることが示された。

A. 研究目的

成人期の発達障害者の地域生活適応に関して必要となる支援のあり方を模索し、提案するためには、まず、現在、成人期の発達障害者がおかれている現状について把握する必要があ

る。そこで、本研究では、グループホーム(以下、GH)の支援者への聞き取り調査により、現在運営されているGHにおいて、発達障害者に対してどのような支援を行っており、どのよう

な困難があるかということ、更にそれらの困難を解決していくためにはどのような方策が必要であると現場職員は実感しているかということをも明らかにすることを目的とする。

B. 研究方法

調査者が把握している、発達障害の診断のある者が利用している GH の支援者を対象に、聞き取り調査を行った。調査は、2013 年 10 月に行った。1 か所への調査につき 2 名の調査者が同行した。なお、調査者自身も、日頃、発達障害者の支援に携わっている者である。

まず、調査の趣旨と、本調査が厚生労働科学研究における調査の一環であることを説明し、了解を得た。GH の概要や、GH を利用している発達障害者の簡単なプロフィールを確認した後、現在、GH ではどのような支援を行っており、どのような困難があるかということについて、あらかじめ用意した項目(食事、衛生管理、健康管

理、金銭管理、人とのかかわり、その他)に基づいて尋ねた。更に、それらの困難を解決していくためにはどのような方策が必要であると感じているかということや、効果がみられた支援についても尋ねた。その他、日頃の支援で感じていることなども自由に話してもらった。

報告書への掲載にあたっては、個人が特定されるようなことがないように十分配慮をすることを伝え、了解を得た。

C. 研究結果

1. GH の概要

聞き取り調査を行ったのは、精神障害者のみを対象とした複数の GH を運営している事業所が 1 か所、身体障害・知的障害・精神障害を対象とした GH を運営している事業所が 1 か所であった。GH の全利用者数のうちの発達障害者が占める割合はそれぞれ、1/29 名、1/3 名であったが、前者では、過去にもう 1 名発達障害者が利用し

ていたとのことであった。

2. 発達障害者のプロフィール

聞き取り調査を行った GH を利用している(利用していた)発達障害者は男性が 2 名、女性が 1 名で、年齢は 30 代～40 代であった。診断は、アスペルガー症候群が 2 名、統合失調症が 1 名であり(ただし、後者については、支援者間で発達障害ありとの見立てが共有されているとのことであった)、障害程度区分(※2013 年 10 月当時)は、区分 2 が 2 名、区分 3 が 1 名であった。また、日中活動先は 1 名があり(就労支援事業所)であったが、2 名はなしの状態であった。

3. 支援における困難

対象者によって語られた支援における困難は、以下の通りであった。

(1) 食事に関する困難(2 件)

食事については、食器洗いに関することが 1 件、食事量に関することが 1 件であった。これらはそれぞれ衛生管理における困難や、健康管理における困難にもつながることである。表 1 に

は、発言内容のトピックス、その詳細、および件数が示してある。

(2) 衛生管理に関する困難(2 件)

衛生管理については、支援の提供に関することが 1 件、偏りに関することが 1 件であった。上記の食器洗いに関する項目(表 1 の①)も、この項目に関連する事柄である。表 2 には、発言内容のトピックス、その詳細、および件数が示してある。

(3) 健康管理に関する困難(0 件)

健康管理については特に挙げられなかったが、上記した(1)の食事量に関すること(表 1 ②)もこの項目に関連する事柄である。

(4) 金銭管理に関する困難(0 件)

金銭管理についても特に挙げられなかった。

(5) 人とのかかわりに関する困難(6 件)

人とのかかわりについては、他の利用者とのコミュニケーションに関することが 5 件、支援者とのコミュニケーションに関することが 1 件であっ

た。表3には、発言内容のトピックス、その詳細、および件数が示してある。

(6) その他の困難(4件)

その他については、支援の提供に關することが1件、物事の捉え方に関することが2件、こだわりに関することが1件であった。表4には、発言内容のトピックス、その詳細、および件数が示してある。

4. 効果がみられた支援

上記の[3]で示した困難はありながらも、うまくいった支援の例としては、ルールの設定が3件、視覚情報の活用が2件挙げられた。また、効果がみられた支援という枠組みでは語られなかったものの、支援における困難について語られる中で、「不安な気持ちなどが身体症状となって表れやすいが、支援者に話をするうちに落ち着く。支援者に、解決策を示してもらいたいというわけではなく、ただ話をきいてもらいたいという側面が強い」といった内容の発言もみられた。表5には、発言内容のトピックス、その詳細、およ

び件数が示してある。

5. 困難を解決するために必要と思われる方策

上記の[3]のように支援を行ううえでの困難もあれば、[4]のように支援の効果がみられることもある中で、そのような困難を解決し支援がうまくいくようにするために必要だと感じられる方策としては、知識の獲得が2件、専門性の向上が1件挙げられた。表6には、発言内容のトピックス、その詳細、および件数が示してある。

6. その他

上記した[3]～[5]には当てはまらない「その他」の所感も語られた。表7にその詳細を示す。

D. 考察

支援における困難について、食事、衛生管理、健康管理、金銭管理、人とかかわりに項目を分け尋ねたところ、人とかかわりに関することが6件と最も多かった。このことから、発達障害者の住まいの場を考える時に、

対人関係面での支援が提供できる環境であるということは必要不可欠なことだと推測された。また、対人関係におけるトラブルと一言で言っても、例えば、ハード面での環境整備をすることで回避することが可能な場合もあるだろう。

しかし、①、③、⑫の発言にみられるように、そもそも支援の提供自体が難しいという事態も生じている。本人が、支援者との関わりを避けるという状態になっている背景については、様々な可能性が考えられるが、支援者側としては、支援者側が行って当たり前と思っている支援が行えないということに戸惑いもあるのではないかと推測される。そして場合によっては、支援者が当たり前に必要なだと思っている支援が本当に当たり前に必要なのかということが揺らぐことによっても、支援の困難を感じることにつながる可能性もある。

一方、効果がみられた支援としては、ルールの設定、視覚情報の活用といっ

た回答がみられた(ただし、⑫については支援者による支援ということではない)。これらはそれぞれ、あいまいなことの理解が難しいという障害特性への配慮、あるいは視覚が優位であるという障害特性の活用と言える。このことから、支援者側が障害特性を理解しておくことの重要性は強調してもしすぎることはない。⑮の発言にもみられるように、本人に合った環境を用意していくことが重要だが、そのように本人に合った環境を用意するためには、発達障害の基本的な障害特性を理解した上で、その人1人ひとりの障害特性の出方を含め、(障害特性のみではなく、全体として)その人がどのようなひとであるか、ということの支援者側の理解(アセスメント)が肝となる。また、効果がみられた支援という枠組みでは語られなかったものの、「不安な気持ちなどが身体症状となって表れやすいが、支援者に話をするうちに落ち着く。支援者に、解決策を示してもらいたいというわけでは

なく、ただ話をきいてもらいたいという側面が強い」との語りにあるように、上記のような具体的な支援と同様に、支援者が丁寧に話を聴くということ自体も、本人の気持ちの安定につながっている。

また、支援における困難を解決するために必要と思われる方策については、知識の獲得が2件挙げられた。②の発言にあるように、支援者側が知識を身につけられることは、利用者への支援の質が高まるという意味で利用者にとってプラスになるだけでなく、利用者に対する理解が深まることにより、支援者側の安心感やモチベーションの向上にもつながるものと考えられる。本人のことがわからず、それに伴ってどのように対応したらよいかもわからず、そのような中でもなんとか対応しようとするがなかなかうまくいかないなどで、支援者の中にもストレスが溜まっていく。そのような支援者側の疲弊を軽減する方策の1つという意味でも、何らかの形で

知識を学ぶ機会が重要ではないかと思われる。支援者たちが、そのような機会を確保し、維持できるような仕組みが必要である。

E. 結論

本調査からは、発達障害者の生活を支えようとする時、対人関係に関する支援が受けられるような環境や、例えば音の過敏性等にも対応できるようなハード面での環境整備が必須であるということが示唆された。また、そのような利用者にとっての環境整備だけではなく、支援者にとっての環境整備も必要であることも示された。それは、支援者にとってアセスメントの手がかりが何らかの形で提供されること、についてはそのような機会が確保できる何らかの仕組み作りである。

今後、対人関係に関する支援が受けられるような環境をどのように整えるか(支援者の養成、支援の仕組みなど)、ハード面での環境整備として現実的にはどのようなことが可能であ

るか、更には、支援者にアセスメントの手がかりが提供されるにはどのような仕組みが有効なのかということを検討していく必要がある。

F. 引用文献

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

肥後祥治・福田沙耶花. (2013). 自閉症幼児のコミュニケーション指導における情報伝達行動の形成の試み：報告言語行動・「なぞなぞ遊び」を通して. 自閉症スペクトラム研究, 10, 35-46.

2. 学会発表

諏訪尚弘・肥後祥治. (2013). コーディネーターへの行動コンサルテーションの効果—PAC 分析を通して—. 第 51 回日本特殊教育学会 (東京).

肥後祥治. (2013). フランスの障害児

教育のシステムの現況. 第 51 回日本特殊教育学会 (東京).

二宮信一・佐藤 航・佐々木恵. 服部健治・肥後祥治. (2013). 社会資源の少ない地域における実践共同体創出の試み(2)—地域で創る新たな資源の意義と役割—. 第 22 回日本LD学会. 自主シンポジウム. (神奈川).

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし

表1 食事に関する困難

トピック	詳細	件数
食器洗いに関する こと	① 食器を洗わずに放っているため、世話人が洗おうとするも、本人は、洗わないでほしいと言う。かと言って、本人の言う通り洗わずに置いておくと食器が溜まっていく一方なので、対応に困っている。	1件
食事量に関する こと	② 自身の小遣いの範囲内で飲食物を購入しているが、量の調整が難しい様子。	1件

表2 衛生管理に関する困難

トピック	詳細	件数
支援の提供に 関すること	③ 居室内が散らかり放題になっているが、本人は、居室へは立ち入らないでほしいと言うため、直接支援が難しい。	1件
偏りに関する こと	④ きれい好きはきれい好きでも、偏りがある。	1件

表3 人とのかかわりに関する困難

トピック	詳細	件数
他の利用者とのコミュニケーションに関すること	<p>⑤ GH という形態である以上、他の利用者とは共有しなければならない空間があるが、その使い方について、支援者が仲裁するも折り合いがつかず、他の利用者が我慢をせざるを得ない状況になっており、対応に困っている。</p> <p>⑥ 物音に対する過敏性があり、配慮したいのはやまやまであるが、共同生活である以上、限界がある。</p> <p>⑧ にこにこしているかと思うと悪い方向に勘違いをして憤慨するなど、感情が安定しないことが、人間関係に影響している。</p> <p>⑨ 他の利用者との間で口げんかをしたり、第三者からちょっと言われたことが気になったりすることで体調不良を訴えることが多い。</p> <p>⑩ 相手が疲れている状態に気づかず一方的に話してしまい、その相手から話すことを止められると、なぜ自分が怒られなければならないのかと憤慨する。</p>	5件
支援者とのコミュニケーションに関すること	<p>⑪ 支援者の発言に対して憤慨することがあるが、その際に支援者は、本人の気持ちが更に高ぶってしまわないように、おだやかな口調で本人の主張をそのままきくことにしている。後日、本人の状態が落ち着いている時に、さり気なく、支援者が当初伝えなかったことを伝えると、本人もきく耳をもってくれるが、それでも同じことを繰り返してしまう。</p>	1件

表4 その他の困難

トピック	詳細	件数
支援の提供に関する事	⑫ 基本的に、本人は支援者との関わりを避けており、定期的な相談は行っていない(本人からの求めがあった時のみ応じている)。	1件
物事の捉え方に関する事	⑬ 新聞記事に書かれてあること(例えば、通り魔事件など)の影響を受けすぎて、外出することに恐怖感を抱き、ひきこもりがちの状態になっている。 ⑭ 物事に対して独特の解釈をするため、その対応が難しい。	2件
こだわりに関する事	⑮ このメーカーのものでないとダメなどのこだわりがみられる。	1件

表5 効果が見られた支援

トピック	詳細	件数
ルールの設定	⑯ 金銭管理については、ルールが設定されていれば、そのルールを守ってやりくりできる。 ⑰ 頻回だった病院受診について、ルールを設定することで、1人で気持ちを落ち着けられるようになってきた。 ⑱ GHの電話の利用について、利用料金を設定すると、時間を意識できるようになった。	3件
視覚情報の活用	⑲ 自分のスケジュールを自分で管理することが難しかったが、管理の仕方(スケジュール帳の活用の仕方)を支援者が教えると、現在はスケジュール帳を持ち歩き、自分で自分のスケジュールを管理している。 ⑳ 強迫症状について、友人からのアドバイス(例えば、手を洗った回数をノートに記すこと)により、まったくなくなった訳ではないが、減ってきている。	2件

表6 困難を解決するために必要な方策

トピック	詳細	件数
知識の獲得	<p>⑲ 支援者は、ストレスが溜まるものの、本人との関わりだけでなく、書籍や専門家のお話などから知識を身につける機会があることで本人に対する理解につながり、支援を続けられているという側面もある。</p> <p>⑳ キーパーにも最低限の基礎知識は身につけてもらう必要がある。</p>	2件
専門性の向上	㉓ 世話人の数を増やすよりも、どちらかと言うと、専門性のある生活支援員の数が増えるとよいという感触がある。	1件

表7 その他の所感

トピック	詳細	件数
その他の所感	㉔ 家族と距離をとることが望ましいが、かと言って1人暮らしも難しいということからGHの利用に至ったのだが、GHでの共同生活という形態が本人にとって適切かどうかは疑問が残る。	1件
	㉕ 本人に合った(本来、本人にとって必要となる)支援が提供されていることで、本人も落ち着いて生活ができているのではないかと思われる。	1件

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

名古屋市での一人暮らしに対する支援ニーズ把握のための取り組み

研究代表者

辻井正次（中京大学現代社会学部）

研究協力者

田中尚樹（非営利活動法人アスペ・エルデの会）

研究要旨

昨年度の調査より、一人暮らしを希望している成人の発達障害者が多くいることが明らかとなった。本調査では、昨年度より一人暮らし生活を実施している発達障害者に面接調査を行い、生活を営む上で必要な支援ニーズを明らかにすることを目的とした。面接調査の結果、整理整頓や清掃などの生活面へのサポート、職場での対人トラブルなどのストレスへの対処に関して、定期的な支援の必要性が高いことが示された。このことから、発達障害者が一人暮らしを行う場合であっても、支援者による定期的な訪問の必要があることが示唆された。

A. 研究目的

1. ひとり暮らし体験について

本研究では、将来的に全国で実施できるような成人期の発達障害者の支援モデルを構築するために、特定非営利活動法人アスペ・エルデの会における地域生活支援の取り組み（ライブプランニングのプログラム、一人暮らし支援）を通して、その実践内容と成果および課題を分析した。

成人期の発達障害者のグループホ

ームの利用については平成 24 年度の愛知県の調査では、ひとり暮らしをしている人は 167 名の回答者のうち 5 名、グループホーム・ケアホームの利用は 12 名であり、家族と離れて生活している人は 10%であった。

昨年度（平成 24 年度）の本研究では、アスペ・エルデの会の成人期のメンバーへの調査では「ひとり暮らしをしたい」という人が 49%で、ひとり暮

らしは不安があるので「グループホームで生活したい」という人が9%と、家族から離れての生活を希望する人が全体のおよそ半数であることが確認された。このことから、発達障害の人にとっては、対人関係が苦手なことや、一人で家事などもできたりする人たちにとっては、頻度としては少なくてもよいので適宜対応してもらえる支援があればよいことなどからグループホームよりはひとり暮らしができる支援の仕組みが必要であると考えられる。アスペ・エルデの会では、前年度のひとり暮らしの実施から実際にひとり暮らしを継続して続けている人が2名いる。そこで、今回は継続的に生活を行う中で、必要な支援ニーズの把握を行った。

2. 障害者総合支援法における認定調査の認定項目について

障害者総合支援法におけるサービスを利用するには、認定調査によって障害支援区分による支給決定を受ける必要がある。平成26年度からの変

更点では知的障害、精神障害や発達障害の特性を反映させるために、読み書きや感覚過敏、集団への不適應などの項目が追加されている。また聞き取りは本人と支援者の双方に実施することになっている。

本研究では、この調査項目について、発達障害者の中でも将来生活支援の必要性が出てくると思われる現在企業就労（一般雇用、障害者雇用）をしている人とその家族に対して実施する。その上で、両者の回答の差異を明らかにし、今回の障害支援区分が発達障害者にとってどのように反映されるかという点について検討した。

以上より、本研究では以下の2点について、調査を行う。

- (1) 発達障害者が一人暮らしを行う上で必要なニーズの把握
- (2) 就労している発達障害者への障害支援区分の反映状況の把握

B. 研究方法

1. 発達障害者が一人暮らしを行う上

で必要なニーズの把握

アスペ・エルデの会では、前年度のひとり暮らしの実施から実際にひとり暮らしを継続して続けている成人2名を対象とした。2名の詳細は後述する。面接調査にあたり、調査協力者には氏名などの個人を特定する情報の扱いには配慮することを伝え、面接調査への承諾を得た。今回の調査では、「食事」「衛生管理」「健康管理」「金銭管理」「余暇」について確認した。

2. 就労している発達障害者への障害支援区分の反映状況の把握

就労している発達障害者（自閉症スペクトラム障害）3名およびその母親に対して面接調査が行われた。3名の詳細は後述する。

面接調査にあたり、調査協力者には氏名などの個人を特定する情報の扱いには配慮することを伝え、面接調査への承諾を得た。

C. 調査結果

1. 発達障害者が一人暮らしを行う上

で必要なニーズの把握

①Aさんのひとり暮らしについて

Aさん：療育手帳保持、一般就労 正規雇用 26歳 男性

ひとり暮らしを始めるまでに、1週間、2週間、1か月、3か月と期間を延ばしながら支援者と親と課題を整理しながら取り組んできている。

今回の調査では、夏と冬の2回訪問し、その間は本人や家族と状況把握を行った。

「食事」では、1日3食の食事を摂っており、自炊も行っている。課題には挙がらないが、調理では冷凍食品をフライパンで熱したり、レトルトに1品食材を入れて炒めたりする程度のものであるため、調理できるものを増やしていけるとよい。

「衛生管理」では、部屋の掃除は週に一度と決めているため、その間に汚れやごみが目立っていても放置していたので、目につくものだけでも気づいた時にきれいにするようにできるとよいことである。テーブルの上の汚

れが特に気になったが、本人は台拭きで毎回拭いているとのことであった。しかし、濡れた布の感触は手の感覚過敏があることをつかめず、力を入れて拭くことができないため、しっかり拭き取れないということであった。

「金銭管理」は、決めた金額の中で、食材や余暇のやりくりをしていたので、このまま継続していくことでよい。しかし、節約を意識しすぎて、食事の分量が少ない感じを受けていたようなので、そのあたりの調整は必要である。

「余暇」は、自分の好きなことに取り組んでいたが、仕事の疲れもあって控えている様子であった。ここでは仕事の不安などの把握と対応の必要性も感じた。

日々の生活では問題ないように思われるが、布団のシーツを洗うことや干すことなどは親からするように言われていたが、できずに布団の壁に接触している部分にカビが発生したこともあったようである。

②Bさんのひとり暮らしについて

Bさん：手帳なし 一般就労 正規雇用社員 27歳 女性

ひとり暮らしを始めたときは、アパートの契約時に、仲介業者の説明が契約後にその内容が変更されたりしたことから不信と不安があったが、生活し始めてからは、特にトラブルもなく生活できている。

特に母親からの干渉が嫌なことや、職場の同僚との余暇を楽しんでいたため、家族との連絡が長期間できていなかったことや休日も余暇の予定が入っているため、支援者の訪問ができないままだった。

一度家族が訪問できる機会があったため、確認してもらうことにした。

「食事」については、買い物もして自炊もしている。

「衛生管理」も片づけも自分なりにしており、物が散乱していることはなく、衣類のアイロンがけなどもしているようであった。

「健康管理」については、特に体調

不良になることもなかったが、休日も遊びの予定が多く入っているため、ペース配分をする必要性があるかの確認は必要だと感じている。

「金銭管理」についても、毎週の支出を見ながら考えてお金は使っているようなので、問題はなさそうであるが、ほぼ毎週同僚との遊びなどの予定が入っていることから、長期的な生活の目標と貯蓄などの確認をしていくことは必要なのかもしれない。

現在は賃貸ではなく、マンションを購入して生活したいと考えている。

(2) 就労している発達障害者への障害支援区分の反映状況の把握

今回聞き取りをした対象者は以下の自閉症スペクトラム障害の3名である。

①Cさん 26歳、精神保健福祉手帳3級、男性、障害者雇用、正規社員、ひとり暮らし

②Dさん 26歳、療育手帳B2、男性、一般雇用、正規社員、ひとり暮らし

③Eさん 26歳、療育手帳C、男性、障害者雇用、正規社員、家族と同居

以上のような回答が得られた。

また関わりのある筆者からの補足事項として、Cさんについては、生活機能2の「口腔清潔」では、母親から「歯ブラシを扱うときに力が入りすぎてしまうので、歯茎などへの負担がかかりすぎている」という話があった。応用日常生活動作では「洗濯」を干すとき、手先の不器用でしわを伸ばすことが苦手であることや「買い物」はできるが、支払いの時に小銭を出さずに紙幣でばかり支払うため、財布の中に小銭がたまってしまうことなどが挙がっていた。これらは長期的に考えると、口腔の炎症の悪化や小銭の紛失などにつながることなどが考えられる。また認知機能の「コミュニケーション」では日常生活に支障がないということではあるが、ごく限られた人とのコミュニケーションはできるものの、会